
約束の橋の上で

グーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の橋の上で

【Zコード】

Z0131Z

【作者名】

グーメラー

【あらすじ】

橋の上で約束を誓つた少年少女四人。いつまでも一緒にいたいと誓つた彼ら達の前に、一人の少女が転入してきた。少女と関わっていくうちに、少年少女四人それぞれの日常は、少しづつ狂い始めていった・・・。

少年少女の約束

「やくそくだよー。ぼくたちはいつもこっしょだ!」

「もしだれかがいなくなつてもー。こじりまわつてよー。」

「もしみんなばらばらになつたら、のまじのつえでもちあわせだよー。」

「せつたいだよー。やくそくだよー。」

夕日を背に、少年少女四人が橋の上に立つてゐる。

少年少女四人は、それぞれの小指を一つに合わせて、橋の上での約束を誓つた。

もし誰かがいなくなつたとしたら、約束の橋の上で待ち合わせをしよう。

もし耐えがたい苦難が待ち受けっていても、橋の上で話を思い出して、その苦難を共用しよう。

もし四人が離れ離れになつても、橋の上の約束を忘れず、心でいつまでも繋がつていよう。

橋の上で誓いあつた少年少女四人は、決してこの誓いを忘れはしなかつた。

どんなことがあつても・・・。

天のお話・少女との出来事（前書き）

青く済みわたつた空、見上げる少年は空が大好きだつた。いつもと変わらぬ空を見上げる、少年の変わらぬ日常。しかし、たつた一つの異変。小さな小さな一つの異変が、少年が見上げる空を変えていった。

空は何色に変わるの？赤？緑？黒？

その問いに、少年は答えを出さうとする。

少年が好きな、永遠に広がる空を見上げながら・・・。

天のお話・少女との出来事

月曜のよく晴れた日の空。空と言つても、晴天、快晴など、同じようでも言い方が色々ある。しかし、多少違えど空はどうも気持ちのいいものだ。

そんな考えが頭をよぎると、俺は歩くのを止めて空を見上げていた。

どこまでも広く続く青い空。どこまでも歩いてこつても、ここが地球である限り、空はどこまで行つても青い。

じゃあ地球の外はどうだらうか？

たくさんの星が光輝いている宇宙は、いつたいどんな色をしているのだろうか。

そんなことを考えていると、小さな空間にいようと/orする自分が急に馬鹿らしくなつてきた。こんな広い青空を見上げる自分は、もつと自由にならなければいけないんじゃないかな？

青空を見上げながら、俺は歩いていた道を戻ることにした。

「どこ行くのかしら？」

「……！」

上を向いていた首を前に戻す。そこに立っていたのは、自分と同じくらいの少女だ。

「お前、空を見てみろ。」

「は？ 何でよ？」

俺は少女と共に、再び空を見上げた。

「」の青空を見てみる。これから小さな空間に縛られに行こうという気持ちなんか・・・無くなるだろ？」

言葉が終わると同時に、俺は少女を交わすように走った。元々、こいつにそんな説得なんか効果を持たない。あくまでも今のは気をそらすためだ。気をそらせれば逃げるのは容易だ。

・・・って、あれ？

「あんたまたそやつて学校サボるつもりでしょーー・今日とこで今
日は許さないわよ！」

猫を黙らせるかのように、俺の首根っこをガツチリとつかむ少女。

「痛い痛い痛い痛い痛い！離せ離せ離せ！離せってー・翡翠ー！」

「いいから学校行くの！今日は絶対に離さないわよー・隆盛ー！」

そのまま首根っこを掘まれたまま、俺は小さな空間に縛られに行
くのだった。

俺の名は銀河 隆盛

そして俺の首根っこを掘んでいるのが緑葉 翡翠

翡翠は幼馴染みで、幼稚園から今の中學一年生までずっと一緒に。その時からか、翡翠は何かと俺を気にかけてくれている。まあ半分は暴力みたいなものだが・・・。

そんなこんなで今日も俺は、翡翠に無理矢理中学校につれていかれるのだった。

「授業とかやりたくないよーー！」

強制的に連れて行かれた教室の机に突っ伏す。

「どうしたの？テンション低いよー？」

「おはよー、隆盛。今日は体調でも悪い・・・訳ではなさそうだね。

俺の机の前に、少年と少女が一人ずつやって来た。

少女の方の名は奏音子

そして少年の方は星原光

どちらも、翡翠と同じく幼稚園からの幼馴染みだ。

俺が突っ伏しているのを見て、具合が悪いのかと疑問に思うのは付き合いの悪いやつだ。だから、俺を見てこんな反応をするのは幼馴染みである三人だけだ。

特に俺は、広く浅く人と付き合う癖があるようだから、人にそれほど深くは追求しないし、追求もされない。

まあ何が言いたいかと言えば、俺のやることの意味を理解してくれるのは、幼馴染みである三人だけっていうことだ。

「よおし！席につけー！」

先生が来たようだ。

学校に着いてから帰るまでの小さな束縛の時間は、昔から何も変わってはいない。いつも通りの朝、いつも通りの授業、いつも通りの昼、いつも通りの下校。何もかもがいつも通りだ。

しかし、いつもと変わらないと思っていた風景が、先生の最初の一言で変わった。

「今日は皆に転入生を紹介するぞ！」

朝の先生の一言は大体は聞き流されるものだが、今日は皆が聞き入っていた。

転入生の存在が先生によつて告げられたと同時に、周りはざわめき始めた。

「転入生・・・ねえ。」

「興味ないの？ 隆盛。」

前の席にいた翡翠が聞いてきた。興味の有無とかじやないのだが、何か気になつてしまつた。

「じゃあ紹介するぞ！ 入つてこい！」

ガラツ！

静まり返る教室に入ってきたのは、髪の長い少女だった。

「天地 響月^{きょうげつ}とあります。よろしくお願ひします。」

ペコリと頭を下げる少女。まるでお人形のようなイメージだ。どこのお嬢様だろうか？

「よし！じゃあ席は銀河の隣に行つてくれ。あの一番後ろの窓際の隣が空いてるだろ？」

そう言つと、少女はゆっくりと歩き出した。歩き方も品があると

「え？ ああ、こちからそよろしく。わからぬことがあつたら聞いてくれな。」

「銀河・・・さん。よろしくお願ひします。」

「うか・・・清楚系お嬢様って感じかな？」

丁寧に頭を下げるは初めてで、何だか萎縮してしまつ。とりあえず精一杯の笑顔でかえしてあげた。

「よし！ じゃあいつも通り授業やるぞ！」

転入生を迎える空氣から一転、矢のように飛び交うブーイング。いつも通り、文句を言わずに俺はお飾りの勉強道具一式と文房具を出した。

しかし・・・。

「あれ・・・？ 消しゴムがない・・・。」

いつも筆箱に入っている消しゴムが、何故か今日は入っていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0131z/>

約束の橋の上で

2011年11月30日22時45分発行